

英語科

生徒の学習意欲を掘り起こし、 英語の学力をつけるための工夫——2年次——

高橋 恵 亮 倉田 有 邦 久保 萬里子
宮田 学 山本 岩 男

[I] 基本的なことがらの定着と興味・関心の 高まりを目指した中学三年での実践

宮田 学

1 週3時間体制の中で

新しい学習指導要領が実施されて以来、中学校における週3時間の英語をめぐる問題が様々な形で取り上げられてきている。筆者も、教師になった時（昭和45年度）の週5時間から、4時間、3時間と3つのカリキュラムを体験する中で、自分なりの工夫もし、それなりの効果をあげようと努めてきたが、そうした体験から、確かに週3時間は苦しい。できれば、以前のように5時間にして欲しいものだと思うが、その一方で、いわゆる「ゆとり」の思想や、過度な受験体制のことを考えると、単に時間数を増やすだけでは根本的な解決にはならないのではないか、という素朴な疑問もある。英語なら英語という教科の中で知識や技能の獲得量を少しでも増やすようなことが期待され、結果だけを見て効果があがる、あがらぬと言われかねないような状況の下では、本来の英語教育は結局わきに押しやられてしまいそうに思われて仕方がない。

問題にされるべきは、果して学校における英語教育に何を求めようとしているのか、という国民全体の姿勢であり、大きく言って学校教育の中で子どもたちがどのように成長して欲しいのか、という教育観なのである。それがあいまいなままで、時間数が減ったり増えたりしても仕方があるまい。誤解していると言われるかも知れないが、英語の時間数を増やせという要求の底流には、高校受験や大学受験に際して不利にならぬように、というあいかわらずの平均的な父母の子どもに対する思い入れがあるように思える。「私立中学校では週5時間も6時間も英語を勉強している。これでは公立中学校に通う生徒は受験戦争に負けてしま

う」という声がそれである。確かに不公平はいけない。しかし、なぜ高校・大学受験に、または就職試験に英語が課せられるのかという根本問題は、そこでは問われることが少ない。中学校における英語教育の性格づけをあいまいにしたまま、一方では時間数が減り、一方では依然として受験学力としての英語が肯定的に受け入れられているのである。

筆者の英語教育に関する基本的立場は、他の所で詳しく論じているのでそれにゆずりたいが、実際には、疑問や問題点を残しつつ、英語教育の営みは続けなくてはならない。昭和57年度から59年度にかけて、生徒たちが中学一年、二年、三年と進級するに従い、彼らに英語を教えてきた。同じ生徒を3年間教えるという経験は、教師になりたての頃以来、2度目の経験であった。だが、今回は週3時間という厳しい条件の下である。一層の工夫が必要とされた。

中1の段階では、GDMの教授法を筆者なりに修正して、英語的枠組の中で生徒たちがものごとをとらえ、表現できるようになることを心がけ、また、自然な発音・リズム・イントネーションがマスターできるようドリルを多くして指導した。状況設定のために、絵や実物を多用した。オーディオ・テープ、フラッシュカードを必ずといってよいほど用いた。英語学習の習慣をつけさせるための工夫や、長期休暇の課題の与え方を工夫して、とにかく毎日少しでもよいかから英語を聞き、話し、読み、書く作業ができるように方向づけた。週3時間体制からくるひずみは、中1の段階で最も強く現れるように感じた。つまり、学校で英語を学習するのが週に3回しかないために、前時とのつながり、家庭学習の生かし方など、「毎日少しずつでもよ

いから学習」という習慣を容易につけさせられなかった。中1では、例えば数学と協同して、週3時間の内2時間分を、前半25分を英語、後半25分を数学という具合に組み合わせることによって、週5回の授業(25分×4回、50分×1回)を確保するような手だてを講ずるようなことが必要であると痛感した。もし、他教科の協力が得られれば、ぜひ、このような授業の持ち方を時間割に生かすように運動した方が、週の時間数そのものを増やす運動をするよりも現実的だと思われる。(残念ながら、本校では、プランだけに終わり、今のところ実行に移されていない。)

中2での実践は、前回の紀要で詳しく報告した²⁾。この実践での通常の授業における「基本的なことがらの定着」を実現するための手順と方法は、中3においても、ほぼ踏襲された。「興味・関心の高まりを目指した」実践では、2つの試みを行った。また、中3という段階では、3年間のまとめの学習を行う必要もあるので、「基本的なことがら」の定着度をチェックすると同時に、発展的な力へと導くための活動として、「英作文シリーズ」の学習も実施した。今回は、昭和59年度の中学三年生に対するこれらの実践を中心に報告したい。

2 中3での授業—新しい手順を求めて

ふだんの授業の基本方針は中2の場合とほぼ同じであった。第1回目の授業で生徒たちに示した「改訂英語学習10カ条」は、中2の時に示した10カ条と1つだけ異なっていた。つまり、二年時では、第1条が「復習中心、授業中心；予習は不必要」とあったのを、若干手直しし、「復習中心、授業中心；予習は不必要だが、各課の始まる前に、新出語句だけノートに整理しておくこと」とした。ただ、新出語句が整理してあるかどうかを点検することはなかったし、授業における新出語句の取り扱いも予習を前提としない進め方で行ったため、授業の手順と方法は、二年時とまったくといってよいほど同じものであった。つまり、前時の復習と小テストの実施、新出事項の導入と応用練習における「わかりやすさ」の追求、「まとめプリント」の作成と活用、オーディオ・テープやフラッシュ・カード、ピクチャー・カードを用いた新出語句の練習と本文の導入・練習、大意把握を中心にすえた本文の意味理解など、二年時に目標・目安とした授業展開のポイントや手順がほとんど受け継がれた。

一学期間は、こうして、二年時と同様な授業の組立てで、それぞれの教材に応じた導入・発展を工夫して指導を重ねていったのである。しかし、筆者と生徒たちのつきあいが3年目を迎えているということで、生徒側にも教師側にも、授業そのものに対する慣れが生

じ、それからさらに緊張感が薄れ、マンネリ傾向へと進むような雰囲気を感じとられたことは否めなかった。

夏休みの間、教授法に関するいくつかの書物に接し、従来の筆者の指導法を変えるような手だてはないものかと、考えをめぐらせた。そこでヒントを得たのが、松畑熙一氏の提案であった³⁾。つまり、筆者の授業パターンとしては、「復習→小テスト→新出事項の導入・練習→本文の理解」というものであった。これを、松畑氏の「新しい型」をヒントにして、まず授業の冒頭に新出事項を持ってきて緊張感を一気に高めることを考えると同時に、その授業中に行った学習内容の定着度をみるために、授業の最終段階で小テストを実施することを原則として、授業を組立てることにしたのである。例えば、Lesson8, Part3では、[資料-1]のような手順をふんだ。

このような新しい手順は、予定通りに進むことはなかなか容易でなかった。それは、決められた時間内に本文の内容理解にまで持ってゆく必要があり、それに続く小テストのための時間を十分に確保できない、ということに原因があった。従来の手順では、前時にやり残したことは、一部家庭学習にまわすなどして、次時の冒頭につなげ、少なくとも、新出語句の練習は家庭で行ってあるという状態を前提にして、復習をはじめ、やり残したことをこの段階で消化したあと、それまでの学習を総まとめし、チェックする意味で小テストが実施できたので、時間的な融通がつきやすかった。新しい手順では、予定通りに進まない、小テストの実施を断念し、次回にまわすことになった。途中で予定を変更して、それまでの学習内容に関する小テストをすればよいという場合もあったが、小テストと言えども、あらかじめよく考えておかないと、すぐには適切なテスト内容が思いつかないので、つい、小テストをやめて、次回の冒頭を実施するというように、従来のような処理をすることが多くなってしまったのである。教室での授業は、教師とクラス全体とのやりとり、生徒間のやりとり、個々の生徒の理解度と表現力、それらに伴うドリルや発問の量と質の微妙なコントロール等々、その場になってはじめて生きたものとなるので、その時々状況に従って授業の内容やペース配分を調整することになる。そうすると、予定通りにはまず進まない。予定通りに行くことなどないと思ってさしつかえない。そういう意味では、従来の手順は、融通のきかしやすいものであったと言える。

いずれにせよ、筆者自身の不慣れもあって、なかなか思い通りには授業が運べなかったが、無理をせず、徐々に新しいパターンでの授業作りができるように心がけた。振り返ってみると、二学期に実施した授業で、最後に小テストができたのは、全体の1/3位ではな

【資料-1】 新しい指導手順の具体例：Lesson 8, Part3 (東京書籍“New Horizon English Course 3”)

1. あいさつ
2. 学校生活を話題にした, ごく簡単な英問英答 (ウォーミングアップ)
3. Lesson 8, Part 3 の学習
 - (1) 新出語句の導入と練習：フラッシュ・カード使用 (表に英語, 裏に日本語); 適宜, 語句・文の具体例で練習する。すべて, 口頭で行う。

draw-drew-drawn cf. drawers
Columbus discovered America. America was discovered by Columbus.
the twentieth century, the fifteenth century, etc.
a piece of chalk, a piece of paper
e.g. Please give me three pieces of cake.
 - (2) 本文の口頭導入：ピクチャー・カード使用 (表にピカソとマチスがディナーを食べている絵, 裏に絵を描いているピカソの絵)

T: This is Picasso. He was a great artist. This is Matisse. He was another great artist. One evening, Picasso went to Matisse's house and had dinner with him. They are having a gorgeous dinner. Look. Well, at that time he saw some pieces of African sculpture. He was very interested in them. So, as soon as he went back home, he began to draw a picture. He tried to capture the beauty of African art.
 - (3) 本文の聞きとり：ピクチャー・カードとオーディオ・テープ
 - (4) 本文の音読練習：①教師のあとについて ②テープのあとについて ③個人練習 ④指名
 - (5) Outlining：ピクチャー・カードを再び示して, 次の質問に日本語で答えさせる。

問1 これは, だれとだれが何をしているところか?
問2 場所はどこですか?
問3 その時, ピカソは何を興味を示したか?
問4 それをどういう行動に移したのだろうか? (ピクチャー・カードを裏にしないで)
 - (6) 日本語で意味を考える文を3つ指定し, 3分間ほど考えさせる。
 - (7) それを含めて本文全体の理解。
 - (8) 新出語句をノートに書く：フラッシュ・カードの日本語の方を利用する。
 - (9) 小テスト：問いを書きとり, 答えを考えて書くテスト。

Q1 Is Picasso a great artist whose works changed the history of art?
Q2 Where did he see a fine piece of African sculpture?
Q3 Did he begin to draw a picture at home?
4. 宿題の指示：ワークブック 2 ページ分

[注] 新出の文法事項 (関係代名詞whose) は, すでに「まとめプリントNo4: 関係代名詞」を用いてすでに学習済みであったので, この授業では, 本文の理解のための学習に集中できた。

かったかと思う。この新しい授業展開について, 生徒たちがどう感じたのかをみるために, 二学期末にアンケート調査してみた。

ア	よい	49%
イ	どちらでも同じ	25%
ウ	よくない	25%

アンケート1：二学期になってから, 授業の最後でその時間で学習した内容の小テストを実施することが多くなりました。以前のように, 次回の復習の小テストという形で行うのと比べて, どうですか?

生徒の回答をみると, 約半数の生徒が新しい手順に好意的であり, 1/4の生徒が否定的, 残り1/4の生徒はどちらでもよいと考えていることがわかった。理由の主なものあげてみると, 次のようになる。

- ・その日に覚えたばかりのことだから、よくわかる(できる)ので 16^分
- ・授業中やる気が出て身につく 15
- ・どこがわかっているかをチェックできる 6
- ・テストでまちがえたりするとさらによく覚わるから 3
- ・授業中だけでは単語などしっかり覚えられないから 10^分
- ・家で復習した方がよいから 9
- ・家で復習しなくなるから 9
- ・予習が必要となるから 3

新しい手順は、生徒たちにとって「授業に集中する度合いが強まったり、よく覚わるようになった」ことや、「到達度評価」ができる点で、よかったという一方で、家で十分に復習する機会や態度をうばいかねないため、消化不良をおこしやすいという点で短所のあることが、この結果から、かなりはっきりとわかる。これは、結局、限られた時間内に能率よく学習できる力があるかないかで生徒を二分することになったわけで、「基本的なことがらの定着」を目指した授業作りとしては、大いに反省すべきであった。

こうした二学期の実践とその結果をふまえて、筆者なりに、「第三の手順」とでも言うべきものを考えてみた。

- ① 前時の最終部分で、本時で扱う教材に出てくる新出語句を、フラッシュ・カードを用いるなどで口頭練習しておく。(この段階では、単語・連語の発音と意味を了解し定着させる)
- ② 生徒たちは、復習として、新出語句を書けるところまでやってくる。
- ③ 本時では、まず、新出の文法・句型事項から入り、緊張感を高める。
- ④ それに続いて、新出語句の復習、本文の導入と内容理解、小テストを行う。
- ⑤ 次時に扱う教材に出てくる新出語句を口頭練習して終わる。

生徒たちにとって、単語・連語を覚えることが最大のネックになっていることを考慮し、これを解消するために、新出語句の練習を2回にわたって行うようにしてみた。1回目は、口頭中心に、まず慣れること。2回目は、家庭学習を前提にして、定着のための口頭練習と書く練習という具合に、2段階で新出語句の導入と定着をはかろうというものである。これは、従来の手順(第一の手順)に類似しているが、その場

合は、本文に入れる前に新出語句を導入・口頭練習し(1回目)、次時の復習の段階で定着度をみながら練習した(2回目)ので、新出語句だけを特別扱いしようとする第三の手順とは若干異なっているのである。

結局のところ、1授業時間の組立ては、その前後の授業展開と密接にかかわっているの、このようなくつかのパターンを組合わせて、Lesson全体の授業を行うようにするのがよいと考えている。1つの決まった型や手順にこだわることなく、生徒たちの反応を見ながら、柔軟に対処してゆくことが最も重要である。また、以上の試みと提案は、中3段階での指導についてであるので、各学年ごと、学習段階ごと(例えば、中1の入門期とそれ以降など)に指導の手順が微妙に異なってくることは、言うまでもない。

3 グループ活動 “Our Study Tour”

本校の中学三年生は、ここ7年間ほど、毎年5月下旬に高山・金沢方面へ修学旅行に出かけている。その特色は、高山におけるグループ別テーマ研究の活動と能登の千里浜における茶わんの絵つけ、キャンプファイヤー等のレクリエーションの活動にある。観光的な内容も含まれるが、生徒たちの思い出となるような活動と、自主的な活動を中心に旅程が組まれる。

そこで、旅行を終えた6月上旬に、まず全員に修学旅行について英文のレポートを書く課題を与えた⁽¹⁾。この自由英作文のレポートを教師が添削して各生徒に返却し(約1か月後の一学期末テスト終了後)、その時点で、生徒たちが表現しようとしたことがらの最大公約数的なものを「修学旅行用語集」と題して、授業に取り入れた。そして、この時間を含めた4時間を用いてグループ活動を実施したのである。つまり、旅行の際の生活班毎(各クラス6班)に“Our Study Tour”という題で1つの作品にまとめあげて、それを、その英文の内容に関する絵(OHPのシートに10枚程度かかせた)とともに発表するという課題を与え、次のような日程で行った。

第1時 「修学旅行用語集」の学習(全体で)；グループ活動(Ⅰ)…返してもらったレポートを読み合う；グループ作品の内容を決め、英文を作り始める。

第2時 グループ活動(Ⅱ)…英文をどんどん作る；と同時に、OHPの透明シートに絵をかき始める。

第3時 グループ活動(Ⅲ)…英文と絵を完成する；英文を読む人、絵を映す人の役割を決める。

第4時 作品発表会：1グループ5分以内で発表する。他のグループの発表を審査する。

〔資料-2〕 “Our Study Tour” の作品より

(1)



We went to a Study Tour from May 23 to 25. We went to Takayama on the first day by train. But one accident at Nagoya station. Our group member, Kiyomi, wasn't there. She forgot her water-bottle, snacks and tapes.

(B組 5班 ①)

(2)



Then we got to Takayama at eleven. We walked the streets and began to study about Takayama. The subject of our study was to ask the people about Takayama. We were to ask some old man and women. Everyone was kind and answered very well. We went to Hida-no-sato. We took a lot of pictures there.

(B組 6班 ③)

(3)

As soon as we got there, we walked in groups around there to have a group work. We asked the shopkeepers many questions about bamboo wares and pickles. The old woman selling pickles in a shop told us these stories.



At a shop

All of us: Hello.

The shopkeeper: May I help you? What are you going to buy?

Masato: Before we buy your pickles, may I ask you any questions about pickles of Takayama?

The shopkeeper: Yes, you may.

Noriaki: What's well-known pickles in Takayama?

The shopkeeper: Akakabuzuke is the most famous here.

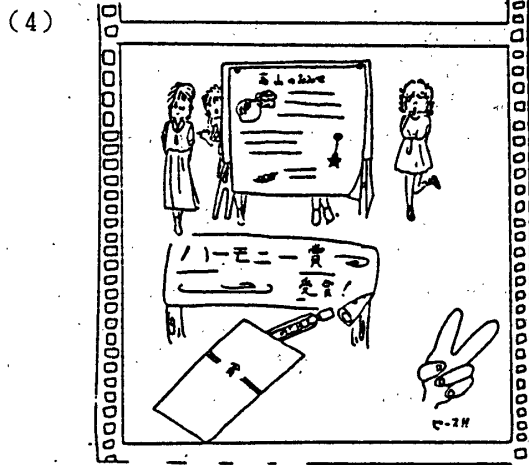
Masashi: When do you begin to make Akabuzuke?

The shopkeeper: In October. We make pickles in every house.

All of us: Thank you very much.

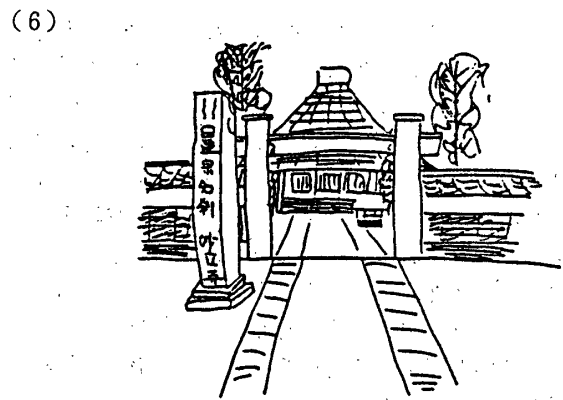
After that, some of us bought pickles. We met many people and talked with them there. Thanks to them, we could learn many interesting things about old Takayama.

(A組 3班 ①)



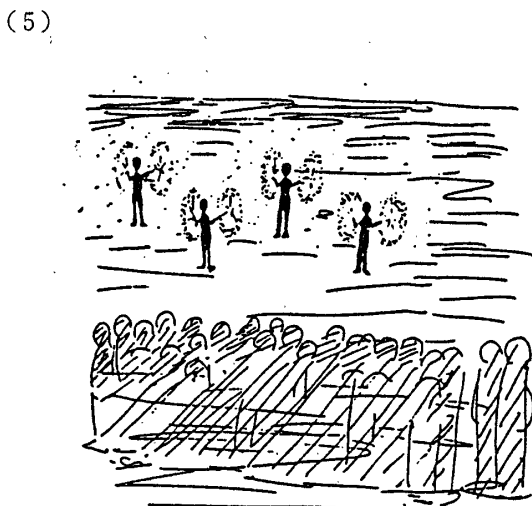
At last we were too tired to clean the streets of Takayama. We visited four places. We thought Yatai in the museum was the best of the four. We studied about shops in Takayama. That night we reported it, and got the first. We were very glad.

(A組 4班 ②)



On the last day of the study tour, we went to "Kitake" first. We were interested in that house. There were many old things to live. For example, picnic box. Then we went to "Myoritsuji". The other name is "Ninjadera". It had a lot of rooms. At last we went to "Kenrokuen", and ate lunch there. The park was very large, and beautiful, with a lot of flowers.

(B組 1班 ④)



At night it was a birthday party for Mr. Iijima and Mrs. Ando. And we enjoyed a campfire and Kimodameshi. We sang a beautiful song "You are my sunshine". And we danced to the music. Then, twirling. It was very beautiful and dangerous. Mr. Hikita and Mr. Isowa got a present.

(A組 6班 ④)



We were sleeping on the train. Because we were very tired. We arrived at about five Nagoya station. Then we said, "Good-bye!" Our study tour was over there. We enjoyed it very much. But Hidenori forgot to bring his pants. We said to him, "What a fool!"

(A組 1班 ⑤)

この活動では、教師が添削したものを生徒に返却したことにより、まず個人レベルで正しい英語表現の学習ができていたために、次のグループレベルでの協同作業がスムーズに進んだようである。また、発表の際には、発表会の雰囲気とグループ間の競争意識が高まるようにと、ビデオカメラで発表の様子を収録するとともに、審査用紙を用意して相互評価ができるように配慮した。審査については、5つの項目（話の内容、英語のわかりやすさ、絵の内容・でき具合、班のまとめ、全体の印象）に関して5段階で評価し、計25点満点で採点できるようにした。発表された作品から、英文（原文のまま）と絵（縮小したもの）を抜粋して〔資料-2〕に示しておく。かっこ内の班名の後ろの数字は、審査の結果のクラス内順位である。なお、発表された各グループの英文を念のため教師が添削し、絵の一部とともに印刷して、英文集“*Our Study Tour*”（25ページほどの小冊子）を作成した。

4 グループによる指導

“*New Horizon English Course 3*”（東京書籍、昭和59年改訂版）は、各課の学習が終わったあと、復習教材として、2つの読み物教材がある。この内、最初の“*Review Reading 1: A Doll with Blue Eyes*”について、各グループの分担をあらかじめ決めておいて、グループが教師の代わりになって教えるという活動を計画した。以前中3を担当した時にも試みたグループ活動であるが、この活動のねらいは、「グループ学習」と「教えること」をセットにすることによって、「教えるための学習」という場を設定し、3年間の英語学習の成果を発揮させるとともに、深みのある自主的学習へのヒントを得させるということにあった。つまり、「人に教える」立場から英文と取り組むことによって、学習ポイントの発見と整理、わかりやすく説明するための深くつっこんだ学習、教具・教材の工夫など、多面的な学習活動を期待できると考えたのである。三学期の2月から3月にかけて、次のような日程で進めた。

第1時 グループの分担決定、司会者・記録係の決定；新出単語・連語の練習と本文の聞きとり（全体で）；グループ活動（Ⅰ）…全体のあらすじをつかむ、疑問点を整理する。

第2時 新出単語・連語の練習と本文の聞きとり（全体で）；グループ活動（Ⅱ）…分担部分の徹底的研究、「学習のポイント」を選び出す、内容に関するQuestionsを考える。

第3時 グループ活動（Ⅲ）…教える場合の順序と方法および役割の決定、内容に関するQuestionsとその答えを完成する、必要な用具などを作る。

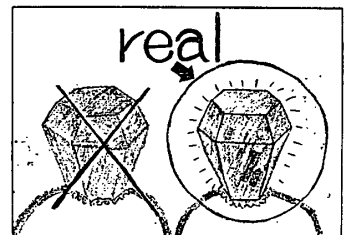
第4時～第6時 各グループによる指導と質疑応答（1時間に2グループ）；指導についての評価を審査用紙に記入する。

第7時 全体で総復習（教師による指導）

この活動を行ったのは、名大附高や私立高校の入学試験が実施される時期であったため、生徒たちの多くは精神的に不安定で、活動にあまり積極的ではなかったように思う。しかし、準備が進み、いざグループ指導の前日ともなると、さすがに、放課や授業後にまでグループで準備を入念に行う姿が見られた。グループ指導の様子を録音・録画するとともに、この活動でも、審査用紙に従って相互に評価させてみた。A組で審査の結果一位になった2班では、グループ全員が各自のいすを教壇の前に持ち出し、指導する生徒だけが立って行えるようにと配慮したり、ピクチャー・カードとフラッシュ・カードを統一した「ピクチャー・フラッシュ・カード」を考察したり、また、青い目の人形の絵では、目が閉じたり開いたりする簡単な仕掛けを工夫するなど、クラスメイトの注目を浴びるような立派なグループ指導ができた。このA組2班による指導の様子を紙面に再現しておくことにする。

授業記録： *Review Reading 1* “*A Doll with Blue Eyes*”（分担パート3；昭和60年2月26日 於中3A教室）T₁～T₇はグループのメンバー（教師役）を示す。

- T₁ えっとー、これから2班の授業の説明を始めます。（拍手）できるだけ静かに聞いてください。
- T₂ 最初は「単語・連語」です。（と言って、**1. 単語・連語**と書いた項目カードを見せる）
- T₃ わたしが発音しますので、ピクチャー・フラッシュ・カードを見て発音してください。（T₄がカードを持つ）じゃ、始めます。kindergarten, はい、どうぞ。
- Class kindergarten
- T₃ kindergarten!
- Class kindergarten
- T₃ real!
- Class real
- T₃ real!
- Class real
- (中略)
- T₃ じゃ、次はピクチャー・フラッシュ・カードを見て発音してください。どうぞ。（T₄



がカードをどんどんかえてゆく。クラスの生徒はそれを見て発音する)

じゃ、今度は日本語を見てというか、途中英語も出てくるけれど、発音してください。

(同じ要領で裏面の日本語を見せる、クラス生徒発音する)

T₃ はい、どうもありがとうございました。それで、be delightedのところなんですけど、このbe delightedのdelightedというのは、本当は原形はdelightというので(と言って板書する)、あの「喜ばす」という意味です。それで過去形がdelightedで、過去分詞もdelightedです。(板書)このbe delightedというのを、参考までに、つづきというか、前置詞とか接続詞とかを言っておくと(板書しながら)、be delightedのあとにwithとか、at, to do, それからthatのあとに文とか単語が続いて、何々に、何々を喜ぶ、という意味になります。どうも、ありがとうございました。

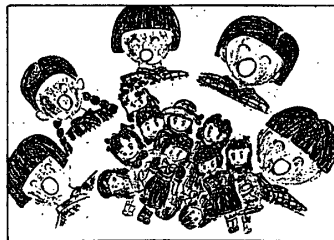
T₂ 2番目は「読み」です。(項目カードを示す)大きな声で読んでください。

T₅ これから適当に区切って読みますから、「ハイ」と言ったら続けて読んでください。

(中略)

T₂ 3番目は「本文の説明」をします。(項目カードを示す)

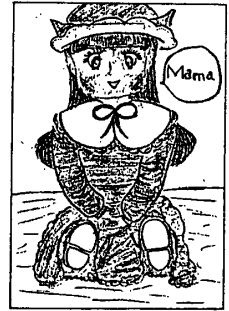
T₅ これから、わからない人のために、ピクチャー・カードを使ってゆっくり英語を読んでいきますから、ピクチャー・カードの方を見ていてください。それから次に質問をしますから、よく聞いておいてください。では、始めます。About 12,000 dolls were sent to elementary schools and kindergartens in Japan. Leila was one of them. How delighted the boys and girls were when they saw Leila!



(右のピクチャー・カードをT₅が示す) She had blue

eyes and red hair, and wore a Western dress and small shoes. (T₅が右上のピクチャー・カードを示す) This is Western dress. In those days most Japanese children wore kimono and zori or geta. The doll could open and close her eyes. (と言うと、T₅が上の絵を作動させて、下の絵のように

人形の目を閉じ、また上のように開いてみせる) She even cried "Mama"! She was just like an American girl.



T₂ 4番目は「Questions」です。(項目カード示す)

T₁ えーと、今から本文についての問題を出しますから、あてられた人は答えてください。まず1問目は、What did Leila wear? What did Leila wear? えーと、谷村君。

Tan She wore a Western dress.

T₁ よろしい。(笑い声;以下、2問目、3問目と進む)

T₂ 5番目は、「重要文の説明」(カード)。

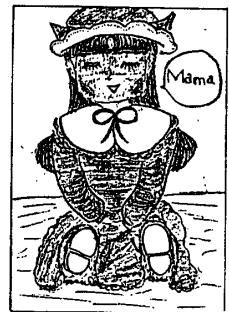
T₅ 教科書の72ページをあけてください。で、大事なところを言いますから、線なんかでマークしておいてください。4行目のHow delighted boys and girls were...のところ。あと1つは下から2行目のShe even cried "Mama"! delightedのちょっと加えるところですけど、あの、このdelightedは形容詞で使われています。この文は感嘆文です。で、She even cried "Mama"!のときのevenの説明をしますから、聞いててください。(2つの例文を板書する;中略)で、こっちのEven children can understand it.というのは「子どもにだってそんなことはわかる」というふうになって、これは名詞を修飾している形です。で、こっちの下のShe did not even open the door.というのは、動詞を修飾しています。で、「彼女はドアを開けさえしなかった」という意味になります。で、重要文の意味を考えてください。あてますから、答えてください。藤井君。

F 彼らはリラを見た時、少年や少女たちは何て、あー、見た時……。

T₅ じゃ、由利子、もう1回答えてください。(Fを見て) あっ、すわっていいよ。

Y 少年少女たちはリラを見た時、何て喜んだことでしょう。

T₅ あたり!次、She even cried "Mama"!のと



A ころを、阿知波さん。
 彼女は、彼女でさえも、ママと言った。
 ……わかんない。
 T。 evenはcriedのところを修飾しているから、それを考えて。
 A 彼女は叫んでさえもママと言った。
 Class (大笑い)
 T。 それじゃ、小林さん。
 K 彼女は、ママとさえも言った。
 T。 あたり！で、終わります。あっ、質問ありませんか？—終わります。
 T。 えーと、これで2班の発表を終わらせてもらいますけど、たいへんわかりやすい説明をしたつもりですけど、わからない点は、あとで聞いてください。では、終わります。
 Class (拍手)

5 総まとめの「プリント学習」

本校では、愛知県下の多くの中学校に見られるような、高校受験のための授業時間外の指導（補充授業、自主学習、夏休み中の特別学習など）を行っていない。しかし、1年から3年の学習内容をいろいろな形で復習できるようにしてやることは、3年間の英語学習を総括する意味で必要なことであるし、基本的事項の定着度をチェックしながら応用力を養うというような練習が、さらに基礎を確実なものにする効果もあるので、三学期が始まってすぐに、10回連続の「プリント学習」を授業に取り入れた。

この学習の中心になったのは、「和文英訳」という従来の英作文の学習であった。3年間の学習内容を10の文法項目に整理分類し、基本的な英作文10題、応用英作文5題の計15題を1回分の練習問題としてプリントを作成し、専用の「英作文ノート」を用意させて、和文英訳演習に取り組ませたのである。

前時に配布されたプリントに従い、各自の答えを自宅でノートに書かせておく。授業では、まず、正解例のプリントを配って、各自で答え合わせを行わせる。答え合わせの間に机間巡視し、質問に答えてやる。この質問をその場で整理し、ポイントとなることから5分ほどクラス全体に解説する。一方、それ以外の質問があれば、各自の英作文ノートに書かせておき、解説が終わった時点で、ノートを提出させる。教師はノート点検と同時に、それらの質問に書いて答えてやる。この点検と回答に約20分ほど必要なので、市販の実力判定テストに取り組ませておく。ノート点検と質問に対するコメントの記入が終わり次第、ノートを返却する（一番前の生徒から順に後ろへ送る）。授業時間の残り5分ほどのところで、ノート点検で気づいたことを

補足説明の形で話す。ついで実力判定テストの解答（および解説）と、次回の英作文シリーズの問題を配布して、その授業を終える。これが1回の授業の実施要領である。（2回目以降は、冒頭に、前回答合わせをした英作文15題より、そっくりそのまま5題出題される小テストが加わる）「英作文シリーズ」は10回分作成したので、こうした授業が1月中旬より2月初旬まで連続して行われた。念のため、授業の流れを〔資料-3〕に示しておく。

〔資料-3〕「プリント学習」の流れ

- | | |
|-------------|--------------------------|
| 授
業
I | 1 「英作文シリーズNo.1」の答え合わせ・質問 |
| | 2 全体的な解説 |
| | 3 「英作文ノート」の提出・検閲 |
| | 4 「実力判定テストNo.1」を解く |
| | 5 「英作文ノート」を返してもらう |
| | 6 補足説明 |
| | 7 「実力判定テスト」の解答・解説を配布 |
| | 8 「英作文シリーズNo.2」配布 |

家

- | | |
|-------------|-----------------------|
| 庭
学
習 | 1 「実力判定テストNo.1」の答え合わせ |
| | 2 「英作文シリーズNo.1」の復習 |
| | 3 「英作文シリーズNo.2」をやる |

授

業

II

- | | |
|--------------|--------------------------|
| 授
業
II | 1 「小テスト」(英作文シリーズNo.1より) |
| | 2 「英作文シリーズNo.2」の答え合わせ・質問 |
| | 3 全体的な解説 |
| | 4 「英作文ノート」の提出・検閲 |
| | 5 「実力判定テストNo.2」を解く |
| | 6 「英作文ノート」を返してもらう |
| | 7 補足説明 |
| | 8 「実力判定テスト」の解答・解説を配布 |
| | 9 「英作文シリーズNo.3」配布 |

この「プリント学習」で最も力を入れたのは、「英作文シリーズ」であった。実力判定テストは、いわば、この英作文の添削のための時間かせぎに行ったといってもよいくらいで、テストの内容もごく標準的なものを選んでおいた。英作文は、前述したように日本語を英文に直すという「和文英訳」型の問題にした。中1から中3までの3年間で、本格的な和文英訳に取り組ませたことはあまりなかった。教科書の内容を復習する際の小テストで英作文を与えたことはあったが、すでに学習した英文の中の重要なものを、日本語を与えることによって思い起こさせて再生させるテストであったので、純粋な和文英訳ではなかった。しかも、ディクテーションや英問英答の小テストをたくさん実施したので、英作文の小テストは量的にも少なめであった。筆者のふだんの授業では、この逆の「英文和訳」の作業も極力少なくするようにしているが、行う場合でも、「この英文は日本語で表現すると、大体どんな意味ですか？」という形で、重要と思われる文(1セクションで平均2~3の英文)を、なるべく自然な日本語で把握することを心がけている。小テストの英作文も、この自然な日本語表現を与えて、既習の英文を想起させたり、多少アレンジした英文を考えさせるようにしていたのである。今回の「英作文シリーズ」の問題を作る時にも、この、できるだけ自然な日本語、自然な文脈ということ意識した。いずれにしても、これほど大量に、しかも連続して英作文に取り組むのは、生徒たちにとって、これが初めてであった。

和文英訳は、「自由英作文」のような活動に比較すると、旧式の英語教育の手段である。自由英作文が生徒たちの自発的な言語活動を目指すのに対して、文法的な正確さや慣用的な語法の定着度・到達度をみるための活動である。しかし、この学習活動には「日本語と英語のずれ」が出ることが多いので、言語意識を深めたり、「ずれ」そのものを学習できるという点で意味があるし、日本語の枠組から抜け出すきっかけにもなりうる。中2から中3にかけて行った「自由英作文」の活動では、教師側としては、生徒たちの自由な発想で、既習の英文を用いて自己表現活動をさせようと思って行ったのではあるが、多くの生徒は、日本語をまず考えてから、それを英語に直すという手順で取り組んだようだった。結局、日本語で15年近くの言語生活を営んでいる生徒たちは、どうしても、まず日本語、そしてそれを英語に直すという順路を経て英文を作る方がやりやすいと思うだろうし、また、それで自分の言いたいことをたくさん表現できると考えてしまう。ここで多くの学習者が陥りやすいのは、いわゆる「逐語訳」である。英文和訳の作業では、母国語である日本語での方が柔軟な表現が可能なので、「自然な

日本語」が出てきやすいが、この逆はきわめて困難である。日本文の文字づらだけを見て、無理やり英文に変えてしまうため、「不自然な英語」となってしまうがちである。和文英訳の活動は、やり方次第で、このことを意識させる1つのよい契機となり、また、よい訓練となりうる。「日本語→表現されていることがら→英語」という径路がいかほど大切であるかを体験させ、実践させられるのである。教師がこうしたことを念頭に置いて和文英訳に取り組むように方向づけてやると、英語の枠組で英語らしい表現を求める活動をもねえらると思うのである。

さて、生徒たちは、英作文シリーズの一回目より、活発に質問してきた。正解例だけではすくいきれない種々多様な表現について、それらがよいのか悪いのか教師の判断を求めてくる。自分で考えた英文だけに、「なぜだめなのか」と何度も聞く生徒も出てくる。動詞の使い方、語順、冠詞の要・不要、前置詞の用法、等々、次から次へと質問が出てくる。英作文ノートに質問をまとめてきた生徒には、時間を気にしながら、できるだけ簡潔に、わかりやすく考え方を示してやる。「なぜか」の説明を書いて、ノートを返してやる。クラス全体では出てこなかった個性的な英文が出てくる。「なるほど」と感心するような鋭い質問も出てくる。もちろん、1クラス40数名の生徒の中には、ただ教師の用意した正解例と一致しているか否かだけを問題にする生徒や、質問と答えのやりとりは自分とは関係がないといわんばかりの態度で聞き流している生徒もいる。しかし、たいていの生徒は、自分でしっかり取り組んでくればくるほど、自分の表現した英語にこだわり、その良し悪しを気にかける。単に「だめ」とか、「いいよ」とかの答え以上の、納得できる説明を求めてくるのである。

6 生徒たちの反応

一学期のグループ活動「Our Study Tour」、三学期の「グループ指導」および「プリント学習」のそれぞれについて、生徒たちがどのように受けとめたのかをみるために、アンケート調査を実施したので、その結果を紹介しておくことにする。

アンケート2： グループ活動「Our Study Tour」について

- (1) 修学旅行の班で行いましたが、どうでしたか
- | | | |
|---|--------------|-----|
| ア | よかった…………… | 66% |
| イ | どちらでもない…………… | 30% |
| ウ | よくなかった…………… | 4% |
- (2) OHPのシートに絵をかいて発表したのは、どうですか？

- ア よかった……………69%
- イ どちらでもない……………25%
- ウ よくなかった…………… 6%

(3) 英文集“*Our Study Tour*”を作りましたが、どうですか？

- ア よかった……………64%
- イ どちらでもない……………31%
- ウ よくなかった…………… 5%

(4) 全体的にはどうでしたか？

- ア とてもよかった……………29%
- イ よかった……………52%
- ウ どちらでもない……………14%
- エ よくなかった…………… 4%
- オ まったくよくなかった…………… 1%

※それはなぜですか？(主な理由)

- ・英語(英作文)の力がついたから 19[#]
- ・(むずかしいが)楽しかった,おもしろかったから 13
- ・修学旅行の思い出がふえた,よい記念になったので 13
- ・教科書によるいつもの授業と違ってよい 10
- ・みんなと一緒にやれたから 9
- ・発表された作品がよかった,おもしろかったから 7
- ・英語の得意な人が英文作りも読みもやってくれたので 2[#]
- ・発表があまり理解できなかったから 2
- ・絵の上手下手がもろに出てしまい,みんなの神経も絵の方に行ってしまったから 2

アンケート3: グループ指導について

(1) グループ指導の活動について(全体的に)

- ア とてもよかった……………12%
- イ よかった……………26%
- ウ どちらでもない……………41%
- エ よくなかった……………20%
- オ まったくよくなかった…………… 1%

※それはなぜですか？(主な理由)

- ・自分たちの分担パートは徹底的に勉強でき,とてもよくわかったから 12[#]
- ・みんなと力を合わせて英語の勉強や作業ができたから 6
- ・なかなか楽しくできたし,授業も楽しく受けられたので 6
- ・教えることの大変さ,むずかしさがわかったから 6
- ・生徒では声も小さく,わかりにくい点が多かったので 16[#]

- ・自分たちの分担箇所はよくわかったが,他のグループの所はあまりよくわからなかったから 4
- ・自分があまり参加しなかったから 4
- ・わかりやすい班とわからない班などいろいろあったから 3
- ・班がなかなかまとまらなかったから 3

(2) あなたはグループで活躍したほうですか？

- ア はい…………… 8%
- イ どちらかといえばそう……………14%
- ウ ふつう……………49%
- エ どちらかといえばちがう……………20%
- オ いいえ……………10%

(3) この活動で学んだこと(あるいは,感じたこと)は何ですか,1つだけ書いてください。

- ・人に物を教えるのはむずかしい 21[#]
- ・先生の苦勞,偉大さ 10
- ・チームワークが大切だ 6
- ・自分たちで調べることによって,理解が深まり,よくわかった 4

アンケート4: プリント学習について

(1) 次の各々について「よかったかどうか」を5段階で評価してください。(以下の数字は,全生徒の評価合計を生徒数で割った平均評定値)

- ① 英作文シリーズの問題 4.47
- ② 英作文シリーズのノート作りと点検 4.26
- ③ 英作文についての質問に関する先生の話 4.26
- ④ 英作文シリーズの小テスト 3.75
- ⑤ 実力判定テスト 3.62

(2) 全体的にどうでしたか？

- ア とてもよかった……………42%
- イ よかった……………53%
- ウ どちらでもない…………… 5%
- エ よくなかった…………… 0%
- オ まったくよくなかった…………… 0%

※それはなぜですか？(主な理由)

- ・3年間の総復習・まとめができたから 16[#]
- ・英作文の力がついた,わかるようになったから 9
- ・受験に役立つ(役立った)から 8
- ・わからないところがよくわかるようになったから 8
- ・自分の弱いところがどこかわかったから 5
- ・いつもの宿題とちがってやる気のでき,興味がわいたから 3
- ・とにかく「英作文シリーズ」がよかった 3

・少し高度な英作文をやって、いろいろ考
えたから

3

3つの活動についての生徒の支持率(「とてもよかった」と「よかった」の合計)をみると、「プリント学習」が95%と断然トップを占め、次いで「Our Study Tourの活動」が81%、かなり離れて「グループ指導」38%となっている。それぞれの「それはなぜですか」の答えをみれば、支持率の高い低い理由が推察できる。「グループ指導」は、昭和53年度の二学期11月にも行ったが、その時の支持率が39%であったのと大差ない。ただ、53年度は「とてもよかった」が3%であったのに対し、59年度は12%と、特によい印象を持った生徒が増えたことが注目される。(否定派も28%から21%へと若干減少した。)また、53年度三学期には、グループ内の友だちが書いた“My School Life”という自由英作文をグループ全員で改良する活動を行った。これは、今回の“Our Study Tour”と同じような目的で行ったものだが、その時の支持率がわずか35%だった(しかも、「とてもよかった」と感じた生徒は皆無であった)のと比較すると、きわめて好評であったことがわかる。これは、53年度の活動が、本人以外のグループ員は他人の英作文を直すということになったために、興味・関心がそれほど高まらなかった点、英文をグループで改良する作業のみで、OHPに絵をかいて発表するという活動とセットされていなかった点が大きく作用したと思われる。“Our Study Tour”の活動では、全員が共通に経験したばかりの修学旅行について、しかも、「発表-審査」という競争的雰囲気の内に行ったことが、意欲を増し、興味をひいたものと思われる。

7 結びにかえて

三学期の最後の授業で実施したアンケートの項目に、「中学校で英語を学習する場合に、あなたは何が大切だと思いますか、簡潔に書いてください」という質問を入れた。中2での実践を報告した前回のアンケート調査では、生徒の学習意欲の増減を分析したが、今回は、3年間の英語学習を終えた生徒たちが、英語学習でどんなことを重要と考えているのか、学習する側の立場で提言をしてもらったわけである。学習意欲が増える方向での配慮をすると同時に、このような学習者の提言に耳を傾け、今後の中学生の指導に生

かせたらと思っている。彼らの意見を集約すると次のようになる。

- | | |
|------------------------------|-----------------|
| 1) 復習を欠かさずにしっかりやること | 24 ^名 |
| 2) 授業に集中して熱心に聞き、練習する | 9 |
| 毎日コツコツと積み重ねて学習すること | „ |
| 単語・連語をしっかりおぼえること | „ |
| 3) 声を出して教科書を読むこと; 発音を正しくすること | 8 |
| やる気・努力・根気 | „ |
| 基礎の力を固める(中1から) | „ |
| 4) 文法・文型; 理屈をはやくのみこむ; 品詞の理解 | 6 |
| 5) 日常会話ができること | 5 |
| 6) 英語を好きになること | 3 |
| 予習 | „ |
| 7) 英文の内容をよく理解すること | 2 |
| 英作文 | „ |
| 本文の暗唱 | „ |
| 楽しく学習すること | „ |

注

- 1) 拙著『英語教育の理論と授業の構想』(福村出版、1984年) 第I部 理論編 5~90頁。
- 2) 拙稿「基本的なことがらの定着と興味・関心の高まりを目指した中学二年での実践」(本校紀要第29集、1984年)。なお、この実践を別の観点から簡潔にまとめた報告もあるので、参照していただければ幸いである。拙稿「基本的なことがらの定着をめざして」(東京書籍『東書中学英語』誌、No. 202, 203号、1984年)。
- 3) 松畑熙一『生徒と共に歩む英語教育』(大修館書店、1982年) 195~203頁。
- 4) こうした自由英作文の課題は、二年時にも4回ほど与えた。詳しくは、注2)の本校紀要の報告を参照していただきたい。
- 5) 拙稿「中学三年におけるグループ学習の試み」; 前掲書『英語教育の理論と授業の構想』135~138頁。
- 6) 昭和53年度の活動内容とアンケート結果については、注5)の報告を参照していただきたい(同書、127~144頁)。